

# 福岡大学医学部同窓会

2005年春号  
鳥帽子会会報

38  
号

## 福岡市地下鉄七隈線開通

平成17年2月3日



■第24回鳥帽子会総会のご案内 3  
〔8回生・18回生担当〕

- 会員の声 23
- 緊急ご注意 25

## 目 次

---

・第24回烏帽子会総会案内	3
・会長挨拶	
共同体と機能体	高木忠博 4
・教授就任挨拶	
教授就任ご挨拶	田代忠 5
・教授退任挨拶	
福大眼科の今昔	大島健司 6
退職にあたって	西丸雄也 7
新鮮で元気がある福大医学部と病院の進化と	
定年で辞めること	都温彦 8
・同窓生交歓 第4回生	熊谷雅之 9
・報告	10
・正門が変わった	11
・教室紹介	
外科学第一	田中伸之介 12
筑紫病院脳神経外科	風川清 13
・会員寄稿	
第4回、日比・慰靈&チャリティーマジックの旅	伊藤実喜 14
トライアスロン200キロへの挑戦	渕野泰秀 15
・支部便り	
宮崎県支部だより	野田寛 17
・特集 クラブ生まれて30年	
バスケット部創設32年 ー永い時を越えてー	田中伸之介 18
	中村浩
	米良利之
	塩飽洋生
空手道愛好会・生まれて30年	二田哲博 21
・キャンパス便り	
医学祭報告	境哲平 22
・会員の声	23
・訃報と追悼文	
重松峻夫名誉教授の訃を偲んで	守山正樹 26
大蔵さんの死を悼む	井上隆則 27
・医局長、医長名簿	28
・教育職員人事	29
・名簿正誤表	30
・事務局からのご連絡	31
・編集後記	31

## 第24回 福岡大学医学部同窓会総会ご案内

今年のテーマは「好いとーメモリーズ」です。

今年も山笠の時期に第24回医学部同窓会総会を開催することとなり、当番幹事である8回生と18回生で準備を進めております。テーマの「好いとーメモリーズ」は博多弁の「好いとー」と「sweet memories」をかけたものですが、めったに会うことのない同窓生や恩師の先生方と思い出を語り合う、楽しい会にしたいという私達の趣旨からこのテーマにさせて頂きました。

昨年は176名が出席して盛大な総会となったようですが、今年も昨年以上に各回生から多くの方が出席されることを願っております。卒後20年目が担当する当番幹事の学年は毎年多くの方がこの会に出席される様ですが、医者にとっての20年目は大きな節目であると思います。大部分の人はその道のエキスパートとして活躍し

ているわけですが、年齢を考えると45才前後にになっているわけですから、医者としての仕事を約半分終えたことになります。さまざまな立場がありますが、いずれにしても自分自身を伸ばす以上に後進の人たちを育てることが主な役割となりつつある時期であります。そう考えると自分の過去を振り返って自我自賛したり反省したりするのにちょうどよい時期であり、過去の友人を通して自分自身を振り返ることはとても有意義ではないかと思います。

今年の講演会は福大卒業生ではじめて東京大学の助教授に就任した黒岩宙司先生（8回生）に世界規模の保健衛生に関する講演をお願いしました。同窓生なので質問なども気軽にできますので、ふるってご参加下さい。

### 第24回福岡大学医学部同窓会総会要領

日 時：	平成17年7月9日（土）	
場 所：	ホテル日航福岡	
時 間：	1. 同窓会総会	午後5:00時－午後6:00時
	2. 黒岩宙司先生講演会	午後6:00時－午後7:00時
	3. 懇親会	午後7:00時－午後9:00時
会 費：	1万円（8回生、18回生の寄付金納入者は無料です）	

総会に関するお問い合わせは下記までお願いいたします。

総会事務局長 白井 和之（8回生）

TEL: 092-801-1011 (3366)

E-mail: kshirai@fukuoka-u.ac.jp

出席のご返事を前ページに綴じ込みの葉書で  
6月20日までに  
お願いします。

## 会長挨拶

# 共同体と機能体

烏帽子会 会長 高木 忠博（1回生・脳神経外科クリニック高木院長）

事業と言うのは全て時代価値観の変化に耐え続けながら歴史絵巻を作って行きます。医学部も26万2800時間と言う歴史絵巻を持っています。最初は全くの白絵巻の状態でした。校舎が完成し人間が集団活動を始めるとそこにソフトが出来ます。そのソフトが時間で動き歴史絵巻を必死に描き始めます。そして暫くすると歴史絵巻が少し絵らしく見える様になります。すると最初は必死に動かし描いていた手を休めて、鑑賞感覚がソフトの中に出没する時期に突入します。創作活動を邪魔する厄介な煩惱の一つ「評論家本能」です。どうも神様は人間の脳を創作本能よりも評論家本能の方に良く働く様に作られた様で、これが何時も創作行動力にブレーキを掛ける事の多い原因のようです。しかしこの創造と評論の関係は表裏一体の問題なのかもしれません。そこでこの評論家本能に関連して考えを進めてみると、人間の集団は暫く同じ創作活動をしていると自然に「共同体」意識と言うのが芽生えて来ます。共同体と言う言葉は一体感があり耳に優しい言葉で日常的に良く使われる言葉です。しかしこの共同体感覚は、社会活動上必ず発生する「責任問題」の時に微妙なバイアスを人間に掛ける代物に変身する気がします。そのバイアスとは、共同体が何か決定した時は記録として連判状を書きます。昔は村社会の連判状は傘連判と言って円状に名前が書いてあり代表が分からないように書いたと言います。この行為の底流には無意識の中に村=共同体と言う公式が含まれている様に思います。共同体意識では「責任所在」の輪郭がボケてしまって、心情的要因が非常に入り易い様に思います。そこでもう一つの人間集団を捉える概念に「機能体」と言う言葉があります。これは人間集団を機能中心に捉えて行く考え方です。組織をその目的別、機能別、効果別など明確な分析項目で具体性を持って集団を捉えて考る名称です。機能体には心情的要因が入る余地は非常に少なくなりますが、反面、無機質な感覚で人間集団を捉えてしまう欠陥を持っています。しかし組織が巨大化すれば維持の為にはどうしてもこの機能体と言う捉え方が必要になるのではないでしょうか。

日本の大学機構は、観察してみるとどちらかと言うと共同体感覚で捉えられていないでしょうか。大学を機能体と考える感覚は希薄な感じがします。村的な捉え方で運営される事の方が多いのではないかでしょうか。しかし欧米人の大学の捉え方は、どちらかと言えば機能体として大学を考えているように思います。大学を機能体として動かしますが重要ポイントでは心情的因素を絶対に混ぜて運営して行きます。ですから心緒的な行動が、無機質な機能体の中で非常に輝いて感じられます。「大学」を寧ろ人間的な組織と感じさせます。又、皆に大学への愛着を感じさせる方法論の一部として、卒業生が作る同窓会と言う組織を上手にシステム運用している所が欧米大学の絶妙な所だと思います。欧米は人間を頑張らせ走らせる方法=人間管理学が非常に発達している様に思います。特長はその人間管理学の基本哲学にhumanityが必ず加味されている事です。その証拠に留学経験者の大多数が帰国後に、欧米大学は厳しいが居心地がトテモ良いとが言います。それは大学の基本的運営技術理念がシッカリ発達している結果としての発言なのでしょう。ですから結果として多様性ある個性的な大学が沢山存在出来るのでしょう。“大学が繁栄すればそれが生み出す果実は人間に豊かな利益を齎して行くはずだ”との確信がないとメリハリの利いた大学運営は出来ないと思います。機能体哲学が当然の様に理解されているから、現実への非常に細かい実効性ある具体的行動がスピードを持って取れるのではないかでしょうか。

残念ながら日本では共同体哲学を基礎とした抽象的行動論が多いので、実行してみると行動が途中で何かギクシャクしてしまうようです。これが欧米と日本の決定的違いではないでしょうか。大学と言うのは機能体として捉えて行くのが本当の運営哲学ではないかと思われます。共同体意識=村意識はその運営過程で時々必要になってくる、単なる添加物的なモノではないでしょうか。我々は共同体と機能体について、もう一度深く考えてみるべき時期に来ているように思います。

## 教授就任挨拶

# 教授就任ご挨拶

心臓血管外科 教授 田代 忠



S51. 3 鹿児島大学医学部卒業  
S51. 4 久留米大学医学部  
第二外科副手  
S53.11 久留米大学医学部  
第二外科助手  
S57.10 聖マリア病院  
胸部心臓血管外科  
S61.12 トロント大学トロント  
総合病院心臓血管外科  
H 2.10 聖マリア病院  
胸部心臓血管外科部長  
H 6. 4 福岡大学医学部  
心臓血管外科助教授  
H16.10 福岡大学医学部  
心臓血管外科教授

福岡大学医学部同窓会の皆さん、こんにちは、昨年10月に心臓血管外科教授に就任させていただきました田代です。まず私の自己紹介からさせていただきます。

私は1976年に鹿児島大学医学部を卒業し、久留米大学第二外科に入局しました。初期研修、研究室勤務などの後、1982年10月より聖マリア病院（久留米市）胸部心臓血管外科に勤務しました。聖マリア病院は救急医療、小児医療が特に充実した病院であり、心大血管疾患の緊急手術や先天性心疾患手術を多く経験できました。1986年12月より1987年11月までの1年間カナダのトロント大学（Prof. R.J. Baird）にて臨床研修（Visiting Professor of Toronto University, Clinical Fellow of Cardiovascular Surgery Toronto General Hospital）を経験しました。帰国後、心臓血管外科の術者としての経験が始まりました。1988年に乳児期の先天性心臓病である大血管転移症に対する補填物を用いない動脈スイッチ手術を日本で最初に行い成功させました。1991年に人工心肺を用いない冠動脈バイパス術（オフポンプ）を日本で最初に行ない現在までに475例を行なっています（同期間に冠動脈バイパス術1212例執刀）。1994年4月心臓血管外科助教授として福岡大学に赴任しました、1999年11月には公開手術である福岡Off-pump CABGライブデモを行ないました。2004年10月福岡大学心臓血管外科教授に就任しました。

私は、大学病院と臨床病院で経験をつんできました。良質な医療を行ない良質な医療人を育てるためには、知識と経験に裏打ちされた最善の治療法を一例一例に選択して行なうことと、その繰り返しを数多くの患者さんに行なうことであると考えます。福岡大学は私立大学であり、高度な臨床医学を実践することと、優れた臨床医を育成することが、教室の使命であると理解しています。私は、福岡大学心臓血管外科において、多数の患者さんに最高の医療を提供することと、全国に通用する臨床医を育てることを目標に最大限の努力をいたします。今後も同窓会の先生方のご理解とご協力を願いいたします。また、若い同窓生の方々の参加をお待ちしております。

## 教授退任挨拶

# 福大眼科の今昔

眼科学 教授 大島 健司



れて来られました。

当時はまだ病院は現在の七隈ではなく、東区の香椎にありました。その頃の一番の思い出は病院の引っ越しで、福岡市の東の端から西の端へと患者さんの搬送に苦労したことを昨日のように覚えています。

その後、昭和53（1978）年4月から教授に就任しました。そのころの状況は教室内はスタッフに値する人は殆どいなく、実績がないために、医学部、病院のなかでも肩身の狭い思いでした。また、周囲の大学病院との関係も決して良いものではなく、硝子体手術や眼内レンズ移植のような新しい手術を始めた福大眼科を圧迫し、敵視しているといってよいような状況でした。

そこで私の決めた目標は、患者さんに対して、最高、最善の医療を提供すること、研究は臨床の中から生まれ、臨床ヘフィードバックさせるということ、日本的眼科の学会において、否、世界において福大眼科の名を知らしめることなどでした。

具体的には新しい手術の開発、手技の練磨、各症例の検討を行い、今まで治療法の無かった

重篤な疾患を治療して行き、更に外来、病棟、手術部における、パラメディカルの協力、教育を行いました。

研究は、眼内画像診断の確立、硝子体の性格の研究、眼内細胞成長因子、特に血管成長因子に関する研究、遺伝子学的研究など、現在の林教授、大里講師、尾崎講師、近藤講師、その他多くの教室のスタッフにより素晴らしい成果をあげ、世界的にも高い評価をうける事になりました。これらの研究の結果、他の追随を許さない臨床、特に未熟児網膜症においては世界一の評価をうける事ができるようになりました。

学会も数々の会合の主催を行い、名実ともに日本のトップクラスの教室である事が認められるようになりました。周囲の大学との関係は、孫子の言にあるように「遠交近攻」、つまり近くとの仲が悪ければとびこして遠くと結ぶという事で力を借り、次第に解消してきました。現在は16の関連病院も持ち、遠く海外から多くの患者さんが来られるようになりました。

又、外国人の医師の臨床訓練も行い、海外での手術の講習会、手術の実施等、私が教授になった頃の西園医学部長からいわれた宿題も果たしたように思います。

いよいよ退職にあたり、多くの患者さん達のこれから医療が心配ですが、今までの福岡大学医学部眼科学教室で育ったスタッフがいる限りはきちんとしてくれると思います。福大在職中の働き甲斐、生き甲斐があったと思っております。

## 退職にあたって

内科学第五 教授 西 丸 雄 也



この数年、入学試験の面接をしていると、本学出身者の第2世にお会いすることがあります。医学部が新設されて30年以上を経たのだから当然とはいえ、その年月の経過に愕然と致します。この32年間を振り返ってみると、最近は学生の卒前教育も随分変わってまいりました。初期の頃は従来の教育法が持ち込まれていました。国家試験の合格率を上げるための努力は受験直前合宿としてなされていましたが、臨床教育は不十分でした。

しかし、第1回の卒業生が出た昭和53年5月、教授会構成員を対象に、博多ガーデンパレスで1泊2日の医学教育の研修がありました。その時の参加者31名で、講師は牛場大蔵日本医学教育学会会長、尾島昭次岐阜大学教授、他1名でした。教育の目標・教育資材の設定、評価の方法など、真新しいことばかりでした。教育は教えることではなく、学ばせることであることを教えられましたが、その研修への参加者が少なかったこともあり、その結果は教育要項の文面

にみられただけで、教育の実情は、少人数教育は形骸化し、講義中心の与える教育が続けられています。

昭和56年に1年間の留学の機会を与えて頂き、折をみては、米国で3大学、カナダで1大学、英国で1大学の神経内科で1~2週間の卒前・卒後教育を見学して廻り、徹底的に臨床に則した教育をみて、これが医学教育だと感じました。

平成4年12月6日~11日の6日間、富士教育研修所で「医学教育者のためのワークショップ」を受講する機会を与えられました。講師陣は牛場大蔵氏、尾島昭次氏、中川米造氏、日野原重明氏らでした。内容は福岡で受けたものとほぼ同じでしたが、その前年から東京女子医大でチュートリアルが導入された話も聞き、我が国の医学教育が変わり始めたのを感じましたが、福岡大学の現状と照らし合わせ無力感を味わったのを憶えています。顧みれば、私は常に傍観者でした。積極的に臨床教育に発言もしませんでした。しかし、有吉・満留・小野教務委員を経て、出石教務委員と臨床教育の内容は高まっています。今後も臨床教育を充実させ、総合的臨床能力の育成が図られるでしょう。

## 新鮮で元気がある福大医学部と病院の進化と定年で辞めること

歯科口腔外科学 教授 都 温 彦

昭和46(1971)年9月、設立間もない九州大学歯学部口腔外科から福岡大学に赴任しました。その前は九大医学部歯科口腔外科に在籍していました。そして医学部創立に必要な病院と

して香椎にあった九電病院が福大暫定香椎病院に変わり、そこに出向きました。香椎病院では診療を行なながら、七隈の福岡大学病院の設計や開院の準備を昭和48年8月当地に移転するま



で行っていました。当時といえば、大学紛争が下火になった頃ですが、浅間山荘事件が起り、どうなることかと医局でテレビ放送を見ていたことが思いだされます。当時、私は36歳でした。

その頃の香椎病院には最初の医学部長と病院長を兼任された樋口謙太郎先生を始め、定年後おいでになられた教授の方々がおられました。その頃の先輩や同輩の先生方は現在、お元気でご活躍中ですが、今では福大を去られて、私と泌尿器科の大島一寛教授だけになってしまいました。これで初期の人達の時代がほぼ終わって、次の新しい時代の福大医学部と病院が始まるものと思っています。

福大医学部、病院創設期の理念と志、そして希望と期待を次の世代へと引継ぎ新鮮で明るい元気のある力強い時代を期待しています。生物は世代の交替とともに進化します。もし変わなければ、そのままの姿に留まってしまいます。

1971年、福岡大学に採用になって以来、本年3月末の退任まで33年6ヶ月の間お世話になりました。赴任した当初は随分先のことと思い、辞める時のことなど想像もつきませんでした。人生定められたことは、いずれその日が必ず訪れることを実感します。今、33年間に溜まった研究資料や書類、荷物の整理、片付けを行っていますが、捨てるこことや保存することに困惑しています。これから的人生は終わることを考えて、その日、その日を充実してできるだけ、整理するこ

とを心がけながら生きたいと思っています。

今までの生き方は行け、行けどんどんみたいなところが多かったことも反省されます。これまで自分がしてきた仕事について反省したり、考えてみたいとも思っています。始めることよりも終わりの始末の方が大事に思われます。

昭和46年9月、教授がいない助教授として赴任してから昭和58（1983）年4月、歯科口腔外科学講座教授に昇任してからも、当科の臨床理念は、歯や口腔、顎の器官や臓器の病気だけを診るのではなく、病気をもっている人間を理解して診療することを掲げて指導してきました。当科の若い医局員と接して感じることは、患者さんにはやさしく、熱心に診療に当たっています。しかし科学的、哲学的に考える力や文章力が乏しいように思われます。考える力や将来、未知のことに対する感性を養い、もっと本を読んで欲しいと思っています。退任後は、これまで顧問をしていた柔道愛好会に時々顔を出して練習のまねごとをしたいと思っています。

終わりに、これまでの福岡大学が築いてきた長い歴史と理念との融和、そして信頼感に基づく医学部と病院の発展に期待したいと思います。



同窓生交歓 No.4

第四回生

二十四年前の昭和五十六年三月、福岡大学医学部を卒業し、内科第二に入局。昭和六十二年には福岡大学大学院を卒業し医学博士号をいただき、それと同時に内科第二を退局。その後、九州大学精神科、国立肥前療養所を経て、平成二年六月から現在に至るまで、雁の巣病院でアルコール専門治療を行つております。福岡大学とすっかり疎遠になつてしまい、やや寂しい気もしておりますが、四年ほど前に大学卒業後二十年目の同窓会総会幹事年をむかえ、同窓会総会の企画の一部お手伝いをさせていただいた時は、久々に昔の同級生と顔を合わせ、当時を思い出し、学生時代にタイムスリップしたようでとても懐かしい気持ちになりました。これからも歳を重ねるとともに、さらに同窓関係が深まればいいなと感じる出来事で、ほんとに良い思い出となりました。

ところで、最近では、アルコール依存のほかに睡眠薬や抗不安薬、鎮痛剤などの薬物依存、パチンコをはじめとするギャンブル依存などのほか摂食障害、虐待、DV (Domestic Violence) など多くの嗜癖行動 (アティクション) が社会問題となつてきています。テレビゲームや携帯電話、ひよつとした社会的引きこもりもその一部かもしれません。段々世の中が変になつていつているような気がしてしまいます。最近、私は、各種学会開催や、海外視察研修にも参加し、昨年は五月カナダ、九月アメリカ、十一月オランダ・スペインへと行って参りました。海外の医療、福祉に触れ、改めて気付くことや、今までおこつてきた事を再確認することも多く、大変勉強になつております。訪れる国特有の文化や芸術、人間性に直接触ることで常に新鮮な気持ちにもなれます。チヤンスがあれば、これからも継続したいと思つております。近況報告をもつて、勤めを果たしたことにしておきたいと思います。皆様の、ますますのご発展、ご健勝を心より祈念いたします。

福岡市東区雁の巣一―二六一  
雁ノ巣病院 副院長 熊谷 雅之



報 告



最終講義 都教授（歯科口腔外科学）  
17. 1. 31 臨床大講堂



最終講義 大島教授（眼科学）  
17. 2. 3 臨床大講堂



学位記授与式 17. 3. 22 大講堂



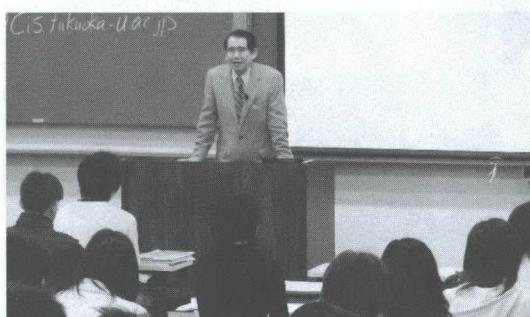
烏帽子会より卒業記念品贈呈  
17. 3. 22 謝恩会にて ホルオーラ福岡



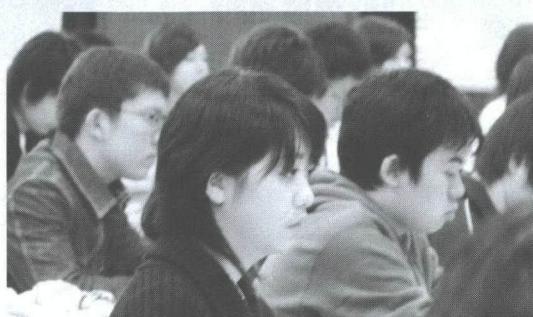
M5、BSL用白衣贈呈式  
17. 3. 26 臨床大講堂にて



M5、BSL用白衣贈呈式  
17. 3. 26 烏帽子会長より学生代表へ



新入生ガイダンス  
17. 4. 3 中一講堂



新入生ガイダンス  
真剣な新入生の顔、顔

## 地下鉄七隈線開通で 正門が変わった

平成17年2月3日、福岡大学の入学試験の前日を期して、待望の福岡市営地下鉄七隈線が開通した。その七隈線は中央区の天神を発し、薬院、六本松を経て福大病院前を通り、そこで

大きく西に折れて西区の橋本に至る。起点天神南駅から福大までの所要時間は16分である。当然「福大前」駅が開設され、正門もその駅舎のすぐそばに移転した。



福大前駅（正門側）



福大前駅（病院側）

## 教室紹介

# 外科学第一

外科学第一 前医局長

田 中 伸之介 (5回生)

外科学第一教室は、一般・消化器外科および乳腺内分泌外科を専門とする教室で、初代・志村秀彦教授のご退任後、平成3年10月より池田靖洋教授が主宰されており、平成17年4月現在、教授以下、助教授2名、講師1名、併任講師1名、助手6名、医員6名、大学院生8名、研究生3名、国内外留学生など5名、関連施設出向者28名の総勢61名で構成されています。さらに昭和63年に設立された同門会は、現在会員数162名（医局員61名含む）となり、教室に対し多大なるご支援を頂いています。

教室の年間手術数は、肝胆脾疾患：約150例、消化管疾患：約200例、乳腺内分泌疾患：約50例を合わせて約400例であり、その多くが日本消化器外科学会専門医制度における高難度および中難度手術に相当するものです。志村教授時代からの伝統であります肝胆脾領域においては、池田教授のご就任以来、逆行性胆管造影（ERCP）を中心とした内視鏡診断治療例（ERCP,EST,IVR）が飛躍的に増加、現在では年間約900例に達し、脾胆道疾患（特に脾癌、慢性脾炎、脾管胆道合流異常症）の症例は質量ともに全国のトップレベルとなりました。この領域は病理学教室に所属する教員や大学院生が詳細な病理学的解析をおこなっており、術前画像診断から手術および内視鏡治療そして術後病理組織診断まできめ細やかな医療が施されています。さらに安波助教授を中心とした

脾島移植研究室では、大学院生を中心に同移植の臨床応用にむけた研究がおこなわれており、全国5施設の脾島分離移植施設の1つに認定され、その実施に向けて日夜研究が進んでいます。また米国ハーバード大学医学部の関連施設であるマサチューセッツ総合病院に出向中（現実は同施設の主任研究員）の小玉君（13回生）が、移植関係の研究成果を2003年のサイエンス誌に発表、この栄誉にあたり本同窓会より研究奨励賞を授与されたことは記憶に新しいところであります。

消化管領域では食道癌、胃癌、大腸癌、炎症性腸疾患（クローン病、潰瘍性大腸炎）などを主に扱っており、なかでも炎症性腸疾患は、当院の消化器内科および放射線科のご支援をいただきながら筑紫病院外科とともに数多くの患者様の治療を手掛けています。研究面では病理学教室に出向した大学院生と協力のうえ、病理組織学的、免疫組織学的、分子生物学的検解析を行い、消化器癌研究での多くの研究業績をあげています。また胆石症に対する腹腔鏡下胆囊摘出術に始まった外科領域の鏡視下手術は、現在では食道アカラシア、胃十二指腸潰瘍、脾腫、副腎腫瘍などの良性疾患はもとより、食道癌、胃癌、大腸癌、炎症性腸疾患などにも応用されるようになり、その手術症例数も年々増加しています。

また教室は、質量ともに豊富な関連施設および出向施設を有しており、白十字病院、糸島医師会病院、博愛会病院、遠賀中間医師会病院、木村外科病院、渡辺外科病院、佐賀記念病院、田丸中央病院、唐津赤十字病院、山元外科病院、副島病院、吉村病院、北九州市立医療センター、浜の町病院、九州厚生年金病院などの各関連施設で一般臨床活動を、北海道大学第一外科（肝臓外科）、プレストピアなんば病院（乳腺外科）、松田病院（大腸肛門外科）で専門領域の臨床修練をおこなっています。さらに米国MGH、MDアンダーソン、癌研究会癌研究所、札幌医科大学などで基礎研究を行うなど、大学内に留まらず国内外において臨床そして研究にと東奔西走する毎日です。



第65回日本消化器内視鏡学会総会を主催  
(平成15年5月 旧シーホークホテルにて)

# 福岡大学筑紫病院、脳神経外科紹介

筑紫病院脳神経外科部長

風川 清

外部に派遣中の医師2人を加えた当科の医局員は総勢10人で、出身大学は5大学におよび、うち福岡大学出身者は4人です。さらに4人の福岡大学卒業生の入局希望者がいて、2年後には総勢14人、福岡大学卒業生は8人になる予定です。

筑紫病院には研究施設もなく、放射線治療装置もないため、最近の5年間は脳卒中の外科治療に特化してまいりました。脳卒中の外科治療は特殊な装置がなくても、先端医療ができること、市中病院に就職した場合に脳外科医師が最も多く扱うのが脳卒中であることからです。現在力を入れている治療は頸動脈狭窄に対するステント併用の経皮的血管拡張術です。従来からの観血的外科治療も行いますが、積極的に本法行っており、脳動脈瘤の血管内治療と併せて、症例数は日本屈指と自負しています。

医局のモットーは若いうちから臨床能力を育てることです。入局1年目から開頭術の術者を経験させています。一番最初にマスターすべき目標は顕微鏡下で1-1.5 mm径の動脈を吻合する手術です。また脳血管撮影を術者として年間150例ほど経験させます。入局2年目からは脳動脈瘤のクリッピング術の訓練を開始します。同時に脳血管内治療による動脈瘤の術者も経験させています。

脳神経外科専門医は卒後7年で取得可能ですが、同じ時期に脳神経血管内治療の専門医と脳卒中専門医を取得することを義務付けています。これらの専門医取得までに、脳卒中の急性期の患者さんを1000人受け持ち、脳血管撮影を500例、脳外科治療を300例、脳血管内治療を100例術者として経験させることを目標にしています。

福岡大学卒4年目の新居浩平先生は初期研修中も当科での研修を行いましたので、3年目より開頭クリッピングの術者や血管内治療の術者を経験し、すでに下垂体腫瘍も手術しています。いまや西日本のすべての卒後4年目の脳神経外科医の中では最も多くの術者を経験していると言っても過言ではありません。

ところが2年後輩の松原周子先生はすでに顕微鏡下の血腫除去や頸動脈のステント治療もローテーション中に行い、新居先生より早くから術者を経験しています。このように臨床医の早期育成を目標にかけ、日夜地域医療に貢献しています。

一昨年よりトレーニングセンターとして恥ずかしくない手術症例の年300件を超える、今年は350件に達しそうです。今後病院全体が救急医療に力を入れることになります。さらに外傷など多くの疾患を経験させてあげることを助手以上のスタッフは心待ちにしています。

これまで多くのお他大学出身者を当科での研修に受け入れてきましたが、人員に余裕ができるこれからは福岡大学出身の若い医局員を他大学で研修させてもらうことも検討中です。



会員寄稿

## 第4回、日比・慰靈＆チャリティーマジックの旅

伊藤医院 院長 (Dr. マジック) 伊 藤 実 喜 (3回生)

今年で4回目の日本・フィリピン慰靈と医療＆マジックの旅は多くの方々にご支援を頂きました。2005年2月11日から15日までマニラで2箇所、のべ3000人の方々と交流。内容は戦没者慰靈、マニラの小学校慰問、医療活動、マジックショー、ストリートチルドレン支援活動、さらに老人介護施設候補地施設等も行いました。内科医1名、博多笑い塾1名、支援参加者4名、計6名で構成され、フィリピンのマジシャン10名、現地支援者6名の協力で感動の5日間。

2月11日総勢6名は元気に出発。機内食と映画を満喫して沖縄経由4時間で期待を胸に南国マニラに到着。

2月12日 マニラから車で約60分、ブラカンに到着。将来、日本の老人介護施設地としての候補地を視察。フィリピンには退職者優遇ビザ制度があります。55歳以上で550万円を政府指定の銀行口座に一年定期預金（一年後使用可能）をすれば、出入国自由なビザが取得できます。明日のバランガイ（日本での公民館）Dr. マジックショーの打ち合わせ、ブラカン市長と総勢20名の歓迎会食会になりました。

2月13日 ブラカンでメディカルミッショング（医療活動）の開始です。フィリピンには日本での保険制度（この制度は世界に類を見ない素晴らしい制度です！）がありませんので、お金の無い人は医者にかかれないのであります。今回はあらかじめ、30名の予約患者を診察。結膜炎、皮膚潰瘍、糖尿病、難聴、アトピー性皮膚炎、腰痛、腱鞘炎・・・と約2時間の診察は終了です。冷たいコーラを頂いて、いよいよ「日比交流のマジックショー」の開始です。ブラカンの子ども達のオープニングダンスショ

ー、フィリピンのインナーマジッククラブ会長クリスの爆笑マジックショー、そして「Dr. マジックショー」です。子ども達をトラックで作った舞台に上げて交流のマジックショーに拍



手喝采でした。文房具やマジック用品やスナック菓子が入ったお土産を約1000人一人一人に手渡して約2時間のショータイムは無事終了。

2月14日 マニラのCeledonio Salvador小学校で「Happy Valentine's Day」として「約3時間のパフォーマンス交流会」です。屋外ステージには約2000人の子ども達で超満員です。フィリピンは子どもがたくさんいますが、公立学校が不足。国家予算が少なく、ほとんどの公立小学校では2~3交代制（午前の部、午後の部、夜間の部）の中で明るく、元気に生活しています。しかし、不幸にもお金が無くて、学校にも行けない子ども達（ストリートチルドレン）もたくさんいます。小学校の教員で月給が約一萬円です。けっして恵まれない教育環境ですが、子ども達のひとみは輝き、希望に満ちた笑顔でした。

子ども達の歓迎ダンスショーでいよいよ開

始。10名のインナーマジッククラブのパフォーマンスショーに大興奮です。子ども達も歌とダンスで大熱演です。最後は「Dr. マジックショー」です。テーブルの空中浮揚、人体の胴体切り、口からトランプの出現、子どもの空中浮揚・・・次々の不思議な現象に会場は驚きの歓声です。

最期はプレゼントを一人一人に手渡して、記念撮影で終了。校長先生とマニラ市長から感謝状をいただき、地元の新聞でも大きく報道されました。

2月15日 充実の旅もいよいよお別れです。10年前レイテ島の井戸掘から慰靈の旅、医療＆マジック交流の輪が広がりました。残念なことに、アメリカ9.11テロから、治安が

悪化。レイテ島では日本人は拉致されるとの情報で、活動をマニラのストリートチルドレン支援活動といたしました。不況時代にあって、テロ、戦争と人類は悲しい争いを愚かにも続けています。しかし、私達は医療＆マジックを通じて、フィリピンの人々とお友達になりました。そして、心の交流も体験いたしました。マジックは人類、宗教、民族、年齢、文化の壁を取り去り、世の中を平和にしてくれます。マジックは地球を救うのです。かなりハードで、満足の5日間でした。機内で感動の旅を思いだしながら、来年第5回の旅を夢見ていました。

[筆者紹介] 日本・レイテ友好協会副会長、  
NPO法人博多笑い塾代表  
フィリピン・ディ・オカンボ医大客員教授

## トライアスロン200キロへの挑戦

医療法人白十字会 白十字病院 外科部長 渕野泰秀（剣道部出身、8回生）



力走する筆者

平成16年4月25日、夜9時すぎ。鉛が入ったように重くなった脚を一步一步前に出してゴールを目指す。“やった！ ゴールできる。完走できる。”朝7時30分にスタートしたトライアスロン200キロの旅は、やがて13時間30分経とうとする今、終わろうとしています。

朝7時30分、全国から集まった1400人のトライアスリートといっしょに宮古島前浜ビーチのスイムスタート地点に立っていました。3kmの

水泳（スイム）、155kmの自転車（バイク）、42.195kmのランの順で行う（制限時間14時間）、いわゆる鉄人レース（第20回全日本トライアスロン宮古島大会）の始まりです。宮古島大会の場合、完走すれば“ストロングマン”的称号が得られます。この日に向けて何度もプールで3kmを泳ぐ練習をしてきました。しかし、プールと海とではわけが違います。波もあるし、潮の流れもあります。足もとどきません。1400人が一斉に沖に向かって泳ぎだすわけですから、スタート地点では池の鯉に餌をやった時のような水中バトルがおきます。また、そこでペースを乱した時、3kmという距離を泳ぎきれるのか？ここに立つまでは、このスイムが不安でたまりませんでした。しかし、不思議なことにスタート直前は緊張もなく冷静で、それどころか、ここにこうやって全国から集まった1400人のトライアスリートといっしょに立てている幸せをかみしめていました。

7時30分、スタート。軽いバトルにあいながらも、沖縄特有の澄み切った海。海底の珊瑚を

見ながら、息もそれ程上がることなく3kmを泳ぎきました。ひと安心。スイムのタイムは1時間5分。上出来！

次はバイクです。バイクになると地面の上だから、海みたいに恐怖心はありません。しかし、23mmの細いタイヤの自転車で155kmも走るとなると、パンクやその他のメカトラブルが心配です。この長丁場のレースの中では最も時間を要するパートです。したがって、力の差が、そのまま大きく総合タイムに影響するわけです。私はバイクが最も苦手で、後続の選手から気持ちのいいように抜かれていきます。しかし、ここで無理をすると最後のランが走りきれないと、自分に言い聞かせながらマイペースを守りました。バイク特有の気持ちよい風を感じながら、青い空、エメラルドグリーンの海、白い砂浜とこんなにすばらしい景色の中を走っているという幸せを心に刻みながら苦しさを紛らわせていました。バイクの時にしか十分な栄養補給はできない（ランになると消化器系がくたびれて飲めるが食べれない）と聞いていたので、バイクに積み込んだドリンクやサプリメントや塩をたっぷりと補給しながらペダルをひたすらこぎました。残り30kmとなったところで終わりがみえて元気になりました。バイク終了時、フルマラソンを残して制限時間の14時間まで6時間を残していました。

最後はランです。ランは地に脚が着いて、スイムやバイクよりさらに安心感があります。しかし、くたびれ果てた体力と制限時間（14時間）との戦いとなります。不思議に気持ちちは前向きで、その制限時間に間に合わない気がしませんでした。島民のすごい応援を受けながら、ランの始まりです。走れる！バイクで脚がくたくたと思っていたのに。ランになると応援の人、ボランティアの人と距離が近づき、宮古島の人々の応援の熱さを肌で感じることができ、苦しくてたまらない体とは裏腹に、今あこがれの宮古島トライアスロンを走っている充実感があふれてきました。折り返しを過ぎ、25km地点からは脚はまさに鉛を入れたように重くなりました。歩いたら制限時間に間に合わない。

エードステーション以外では絶対歩かない、止まらない！と決めてコツコツと距離を刻みました。走っているとは言ってもほとんど歩くのと同じようなスピードでした。いよいよ残り15kmとなった頃、もう真っ暗。“このまま走り通せば間に合う。ゴールできる！”ゴールがある平良（ひらら）市街の灯りが見えてきた時、ほっとして涙が溢れきました。これまでのトレーニングのこと、試行錯誤しながら今日のために準備してきたこと、レース前は不安でいっぱいであったこと、完走できる健康な体を授けられたことに対する感謝の気持ちなどが次々と頭のなかに浮かんできました。不思議に泣けると苦しさはどこかに飛んでいってしまうものです。平良市街に入ると、ゴールのある競技場まではすごい応援です。そんなこんなで最後の5kmは今までの苦しさはどこへやら。夢心地でゴールテープを切ったのは制限時間の14時間まで、12分を残す午後9時18分でした。

城崎 洋先生（白十字病院 副院長、2回生）に初めてトライアスロンレースに連れて行ってもらってから8年目。これまでショートタイプ（スイム1500m、バイク40km、ラン10km）のレースを中心に40レースに出場しすべて完走してきました。ロングタイプのレースは今回が初めてでした。ショートタイプのレースも厳しいものですが、今回の大会（第20回全日本トライアスロン宮古島大会）を完走できたことは、おかげさかもしけませんが人生観を教えてくれた気がします。完走できたことはもちろんですが、それに向けて努力した過程、気持ちの持ち



スイムのスタートを前に

方が自信になりました。そして、健康であることのすばらしさを実感し、両親、家族に心から感謝しました。頑張るベクトルの向きが間違っているのではないかと、冗談で言われることもありました。大きな目標を掲げて、それに向かって色々と考えながら準備していく、調整していく楽しみ。その過程が楽しい。健康管理はもちろんのこと、職場や家庭でも充実していかなければなりません。そして目標を達成する。そんな感動を味わえるのは年齢には関係ないのでし

よう。さて今は、タイムを縮めることを目標にして次回の宮古島大会の準備しているところです。

最後に、今回の大会出場中の留守を快く許してくれた白十字病院外科のみんな、トレーニングとともにやってきたトライアスロンの仲間たち、そして家族・・・みんなに支えられて、この感動を味わうことが出来たということに感謝します。

## 支部便り

### 宮崎県支部だより

宮崎県支部長 野 田 寛 (4回生)

宮崎県は3箇所でミニ同窓会がそれぞれの方で開催されております。今回は、H17年2月18日に県北のミニえぼし会が開催されました。ホテルの中の中華料理店に9名が集まりました。2ヶ月に1回の予定ですが、、、

今回の話題は旗です。各支部に贈られた、烏帽子会と福岡大学の旗についてH16.11.11に県支部総会にも壁に掲げて記念撮影しま

したが。県北の集まりでも披露できました。

支部長が旗を持ち各地に出向き、より一層の団結を誓い同窓会を盛り立てていく草の根活動をしていかないと、人が増えてなかなか統制が取れにくくなります。

まして10年以上が離れるとどこの人?ですかね。小さな集まりは気心もわかり話が弾み二次会へとなだれ込みました。



旗を背に

## 特集 クラブ生まれて30年

# バスケット部創設32年 - 永い時を越えて -

田 中 伸之介（5回生 1982年卒・外科学第一）  
中 村 浩（11回生 1988年卒・中村外科肛門科医院院長）  
米 良 利 之（25回生 2002年卒・白十字病院 外科）  
塙 鮑 洋 生（26回生 2003年卒・山元記念病院 外科）

昭和47年、福岡大学医学部創設に伴い、同年9月に4つの愛好会が初めて設立された。ラグビー、準硬式野球、アーチェリー、そして我がバスケット愛好会である。つまりバスケット愛好会（以後、慣例的に「部」と称す）は医学部の中で最も歴史のあるクラブの1つなのである。平成14年9月で満30歳を迎えたが、記念式典が延び延びになっているのはちょっと残念である（今年こそ何とか開催したいと頑張っています）。

鳥帽子会会報の特集「クラブ生まれて30年」の原稿依頼をうけて2年、やっと重い腰を上げることにした。小生（田中）が書けば創部当時の思い出に終始し、ちょっと興味薄かな？と思ったので、頭書の4名で合同原稿にしてみた。それぞれの時代での思い出が綴られれば面白いものになるのではないかでしょうか。創部32年、最初の10年が創設期、次の10年が充実期、それ以降が発展期とでも言えましょうか。では以下3部作をお楽しみ下さい。

### 第一章（創設期）

#### 創設期の思い出（文責：田中）

前述の昭和47年（1972年）秋、数人の先輩により設立届けが大学に出された記録がある。その後練習場と部員不足のためだったのか、小生が入学した昭和51年春には休部状態になっていた。小生は、当時薬学部バスケット愛好会の朝練に参加していた向坂彰二郎先輩（4回生）、安藤三英先輩（4回生）、小山雅也先輩（4回生）を慕って同級生の福江君と朝練に参加するようになった。九山大会には以前に数回参加していたようであるが、西医体はこの年昭和51年の夏が初めての参加であった。小生は何故かこ

の時のことを鮮明に覚えている。メンバーは前述の5人に三宅敬二郎先輩（3回生）、田辺庸一先輩（3回生）を加えたわずか7人であった。スコアブックもない、メンバー表もない（久留米大学チームにいただきました）、ユニホームもない（薬学部バスケット愛好会に借りて出場しました）、5人をコートに送り込むと、2人しかベンチには残りません。でもでも、相手は京都大学、名古屋大学の国立組（我が大学をえた3校総当たりの予選リーグ）、「頭脳で負けても体力だけは」と臨んだ対戦、しかし見事に敗退した。それもどちらもダブルスコア。ちょっと凹んだのをよく覚えている。翌52年春、小生が2年生の若輩にもかかわらず主将に就任させていただき本格的にクラブ活動を再開した。以前クラブに参加されていた数人の先輩にも声をかけ、また噂を聞いては経験者の後輩を募り、20人近くになった部員で再開後約2週間で九山大会に再び参加した。熊本大会であったと記憶する。結果は予想に違わず惨敗であった。がしかし、その夏の西医体では近畿大学相手に96-32の大勝をおさめるにまで戦力アップ、チームが少しずつ形になってきた時代であった。その後、数多くの部員がその時代時代に輝かしい（？）戦績と伝統を刻んでいくことになる。

### 第二章（充実期）

#### 冬から春、夏そして冬へ（文責：中村）

個性豊かな諸先輩に支えられた70年代の創生期も80年代に入り次第に変革の時期を迎えました。ガード（赤松：88年卒）、センター（中村淳：87年卒）と期待される人材が入部しました。しかし、それでも当初は呪縛にかかったように

大会で勝つことが出来ない冬の時代でした。遅い春が来たのは、1984年夏の西医体でした。蒸し風呂の体育館で勝ち上がり、大濠花火大会をキャンセルした神戸でベスト8進出。そこへフォワード経験者（吉永：88年卒）が加わり、季節は一気に春から夏へと向かうことになりました。1985年の九山（大広間で全部員12名が雑魚寝した唐津）でボロボロになりながら延長戦の末、優勝。1986年の九山（風呂の壊れたホテルに泊まり、帰りは「にちりん」一両を乗っ取つて騒いだ大分）と九山2連覇を達成しました。当時のチームは、圧倒的なリバウンド力を武器にスローゲーム・ロースコアを特徴として恐れられて（嫌がられて）いました。こうして迎えた二連覇の夏の時期も、勝つことに専念し後輩の育成を怠ったため、再び氷河期ともいえるような長い長——い冬の時代を迎えることになりました。

### 第三章（発展期）

#### 新時代の到来（文責：米良および塩飽）

25回生の米良です。現在の私しか知らない方たちが聞くと「ありえない」と信じてもらえないかもしれません、学生時代はバスケットボール愛好会に所属していました。ボールではなく、一応選手としてです。ワインを片手に、その頃の思い出を振り返ってみようと思います。

当時の私といえば、空飛ぶ冷蔵庫、飛べる豚（後に飛べない豚）などと数々の異名をとったものです。しかし今思えば、波乱万丈な6年間でした。1年生でスタメンを勝ち取るという輝かしいスタートを飾り、2年生になったと同時に優秀な後輩に追われ試合に出られなくなり、3年生では九山の主管責任者を任せられますます試合が遠のき、4年生になると選手兼監督とおだてられ気付いたらますます試合が遠のき、5年生になるとやめようにも今更という状況で、6年生になると開き直って楽しむだけ楽しんでいました。そして、いつの間にか卒業していました。あまり細かいことは覚えていませんが、とにかく良く飲んだ記憶があります（記憶は良く失くしていましたが）。試合に勝っては

飲み、負けては飲み、練習しては飲み、練習しなくても飲み、同時期に学生時代を過ごされた方々はご存知かもしれませんがすさまじい飲み会が日課でした。もちろん、ちゃんと？バスケットもしていました。春の九山、夏の西医体は忘れることができません。一年生春の北九州市に始まり、6年生最後の夏も北九州市でした。二年生の時には西医体でベスト8（得失点差で5位）になり全医体出場、山形へも行きました。あの時はるばる応援に駆けつけてくださった顧問の岩崎先生の笠をかぶった姿が今でも目に焼きついています。それでも順調にバスケ部第二期黄金時代？を築けるはずが、そううまくはいきませんでした。もっと勝てるはずなのに勝負弱い、スタミナ不足、層の薄さ、若手起用の問題など様々な壁にぶち当たりボチボチの成績に留まるばかりでした。そんな中でも私生活はだらしないがその抜群のプレーとカリスマ性で引っ張り続けた光武さん、犯罪スレスレの奇妙な動きと実は細かい気配りで皆を鼓舞し続けた前山君、二人を中心に徐々にまとまりを見せ最後の大会まで悔いの無い戦いを繰り広げることが出来ました。

医師になってからも愛好会に入っていたからこそ嬉しかったこともあります。実は昨年北九州市の病院で4つ上の先輩、3つ上の先輩と一緒に働く機会がありました。懐かしい話で盛り上がり、仕事の相談などもしながら充実した1年間でした。やはり先輩の存在は頼りになり、昔を思い出しました。私は果たして後輩にそういう風に見られていたのか、見られているのかという不安も覚え、学生時代も医師になってから多くの先輩に助けられてきたことを改めて考えさせられました。（ワインも残り少なくなってきたのでまとめようと思います。）今回懐かしいことをいろいろと思い出してみて言える事は、他のサークルの皆さんには申し訳ないが、バスケットボール愛好会は最高のサークルだったということです。これからも後輩たちにはそうあることを期待しています。

そして若手を代表してもう一人、26回生の塩飽です。今年で32周年を迎えるということで、若い（？）世代を代表してご挨拶をさせて頂こ

うと思います。とはいっても、私が福岡大学バスケットボール部に所属してまだ8年、この部の歴史の1／4しか語ることができません。の大役は諸先輩方にお任せするとして、私は福大バスケ部OBが現在どのような活動をしているかをご紹介させていただこうと思います。

まず最初にご紹介するのは、福大病院バスケットボール部です。バスケ部OBを中心に福大病院に勤務するドクター、ナース、MRさん、現役生で、月2回練習しています。練習場所は主に藤崎の『ももちパレス』、日曜の18:00から楽しくやっております。またチームとして目標を持つ意味で年に2回、大会に参加しています。10月は一般の大会、1月は九州・山口の大学病院対抗の大会、いわゆる九山OB戦です。本大会は今年の1月に福岡大学の掛け声で、はじめた大会です。現役生の協力で、先日盛況に終えることができました。第1回に参加したのは大分大学、九州大学、佐賀大学、長崎大学、福岡歯科大学、福岡大学OB、福岡大学現役の7チーム。来年の1月にも第2回大会を福岡で開催する予定にしています。このような活動の紹介を福大OBのHPとして

<http://www.geocities.co.jp/CollegeLife-Library/8277/>で紹介していますので、興味のある先生は是非一度ご覧ください。



現部員達、女性部員も入り大所帯になりました。

### 最終章 終わりに

行き掛かり上、5回生の小生が原稿をまとめることになりました。依頼原稿は一部校正したのみで殆どが各個人の原文どおりです。従って文体が不揃いであったことをお許し下さい。また創設時にはまだまだ私の知らない多くの苦労話があったものと思われます。そうしたエピソードをここで紹介できませんでしたことを諸先輩方にお詫びいたします。さらに32年の長い歴史を支え築いてくれた多くの素晴らしい部員に感謝するものであります。最後になりましたが、我がまま息子と我がまま娘達を優しく見守っていただきました歴代顧問の菊池昌弘教授（現、福大副学長）、古野純典助教授（現、九大公衆衛生学教授）、岩崎宏教授（現、病理学教授）に深謝申し上げます。

折角ですので現役部員に近況を報告するように伝えましたところ、ここ数年の戦績資料を届けてくれました。詳細は省きますが西医体ベスト8-16止まりというところですかね、ちょっと寂しいです。でもバスケット部のホームページのアドレスを知らせてきました  
([www.geocities.jp/fukuoka-medical-basketball/](http://www.geocities.jp/fukuoka-medical-basketball/))。

IT時代ですねー。アナログからデジタルへ、まさに新しい時代の到来です。

昭和53年～54年頃か？ 皆、若い!!



## 空手道愛好会・生まれて30年

二田哲博クリニック院長 二田 哲 博 (9回生)

福岡大学空手道愛好会は、昨年で30周年を迎えるました。それを記念し昨年7月に、福岡大学文系センターにて30周年記念式典ならびに懇親会が開かれ、各地から26名のOBらが集い旧交を温めました。OB会は、空手の練習に使われる丸太に藁を巻きつけた「まきわら」にちなんで、「まきわら会」と呼ばれています。現在、約70名が在籍しています。

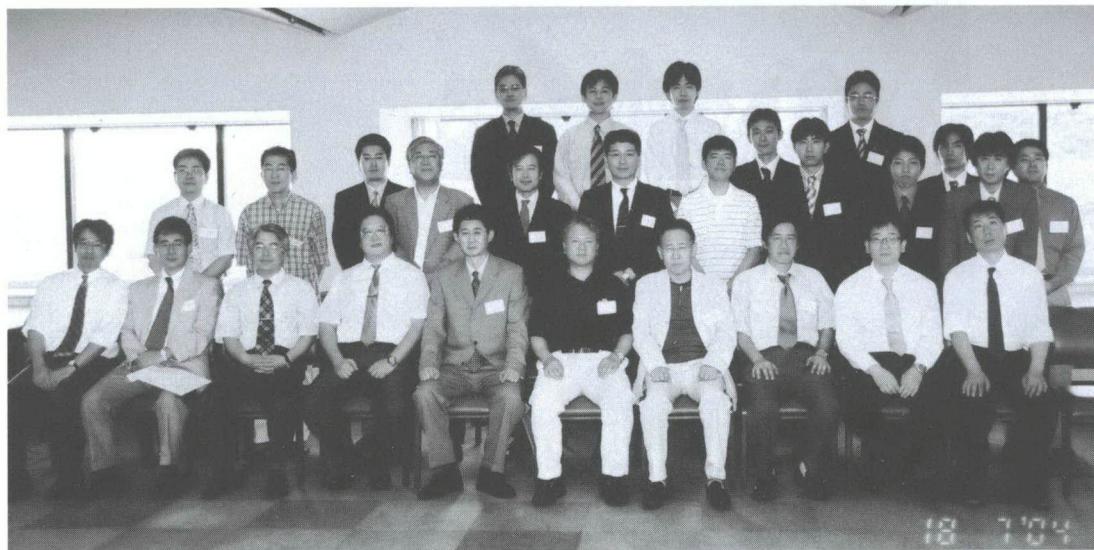
さて、わが空手部は一大旋風を巻き起こしたブルース・リーに端を発しています。ご存知のように、1973年12月に公開された映画「燃えよドラゴン」により日本はブルース・リーブームに突入しました。TVや雑誌などはブルース・リー一色に染まり、その当時の若者のはほとんどが彼に熱中し、空手や少林寺拳法を学ぶ者が続出し世界的な空手ブームとなったのです。最初空手部はそのような数名のブルース・リーファンが集まり、彼の技を研究?する「ブルース・リー愛好会」として発足したと聞いています。その後、空手や拳法の経験者が加わり、空手部創立へと繋がっていったようです。

当初より九州山口体育大会や西日本医学生体育大会に出場はしていましたが成績は芳しくなく、当時の部長である曾田前耳鼻咽喉科教授(前病院長)が、日本空手協会師範の神野勝先生を監督に迎えました。当時の九州の医学生の

空手のレベルは大変高く、全日本チャンピオンもいるなど、強豪がひしめいていました。その中で神野先生の厳しくも的確な指導を受けた我々はめきめきと力をつけ、創立7周年を迎える昭和50年頃には西医体を連覇するなど華々しく活躍しました。その数年間が空手部の黄金期だったといえるでしょう。

その後、徐々に部員の減少とともに成績も停滞し、ついに今年に至っては、試合に出場できるのは6年生の部員一人となってしまいました。30周年を迎える歴史ある空手部の灯を絶やすぬよう、昨年の記念式典時に開かれた会議で、今後はOBが協力し新部員の獲得や練習のコーチなどに力を入れバックアップしていくこうと再確認しました。

なかなか時間がとれませんが、学生の練習に付き合おうと、空手部の練習場として使っている第二記念会堂を訪れることがあります。時代は変われどそこにある空気は昔のままで、汗や血を滲ませながら練習に励んだ学生時代の記憶が蘇ります。辛く苦しい事も多くありましたが、今となっては懐かしい良い思い出です。そのような経験をこれから的学生諸君とも共有したいと思っています。今後、多くの部員が入部し、再び空手部を盛り立ててくれることを切に願っています。



## キャンパス便り

# 医学祭報告

第24回医学祭実行委員長 境 哲平 (M5)

昨年、11／3（水）～11／6（土）に福岡大学七隈キャンパスにて第24回福岡大学医学祭を無事終えることができました。私たちは「僕たちが伝えたいこと～変わりゆく医療の中で～」というテーマのもと、約半年間走り回って準備してきました。

パンフレットでは、癌治療の今・新臨床研修医制度・福大生性感染症意識調査・家庭の医学を特集とし、トピックスとして六人の先生方に一筆書いていただきました。また、医学祭期間中には伊藤実喜先生によるマジックショー（約400人）・大bingo大会（約1000人）・お笑いライブ（約800人）・臓器展示（癌・心疾患・脳血管疾患・幼児虐待について）を行いましたが、例年より宣伝や呼び込みを強化した効果もあってか立見が出るほど大成功を収めることができました。

福岡大学七隈祭・医学祭における模擬店出展数では西日本最大級ですが、せっかくの休日だからということで旅行に行ったりバイトしたりする学生が増え、学園祭参加人数が年々減少しています。僕たちは学生生活の中で利益や損得のない何かを仲間と作り上げるという熱い気持ちを持ってやってきたので、その時のきつさも今では良い思い出となっています。

医学祭を行うにあたって、御指導・御支援・御協力を賜りました諸先生方や福岡大学医学部同窓会の皆様方に心より厚く御礼申し上げます。これからも学生一同医学祭を盛り上げ、より多くの先生方に興味を持ってもらい参加していただけるような企画作りにがんばっていきますので、これからもどうぞよろしくお願ひします。



左：大bingo大会

左下：救命救急処置指導

右下：マジックショー



## 会員の声

会員名簿第8号資料調査票から

### 【消息】

- ・白秋会会长として多忙な毎日を過ごしております。 (1回生、大城 昌平)
- ・検診に巡回出来るアルバイト医がおられたら教えて下さい。 (2回生、成富 修)
- ・7月頃、クリニックは移転します。 (8回生、青柳 玲)
- ・北海道の地域医療は医師不足のため危機的状況です。どうか同窓生の力を貸し下さい。 (8回生、堤 伸一郎)
- ・毎週火水は福大病院検査部にて心エコーをするため来福しています。 (9回生、野元 淳子)
- ・開業して7年になります。何とか生き残っています。 (14回生、桑原 仁士)
- ・たぶん慶応に入局したのは自分が最初だと思います。後輩に、慶応に入局して思った事など話す機会があればぜひ参加したいと思います。 (17回生、松本 慎二)
- ・最近、運動不足で太り気味です。 (18回生、西川 宏明)
- ・平成15年4月に、25回生篠崎夏樹と結婚致しました。 (26回生、篠崎 理：旧姓 團)

### 【会費】

- ・年会費1万円は高すぎるとと思う。 (2回生、M)
- ・患者減少、借入金多額のため今のところ同窓会年会費は入金できません。 (5回生、M)
- ・他学のように、年会費を払わない場合、名簿や会報等を送付しないといった措置をお願いしたいと考えます。現鳥帽子会の場合、年齢の上限も決められていて、生きてる限り支払う事になり、退職後の会費請求は不適切です。 (9回生、F)

### 【事務局より】

上限年齢について、卒業生がその年齢になるまでには当然決めねばならない問題です。

### 【名簿】

- ・福大の名簿を見て・・・という事で、不動産等の電話がしつこく(1日数回)あります。名簿の管理を宜しくお願いします。 (3回生、T)
- ・業者への名簿の流出が大変多く、対策を講ぜられないものでしょうか。 (5回生、A)
- ・流出名簿によると思われるマンション業者等の電話が多いので、自宅情報は載せないで下さい。 (5回生、I)
- ・迷惑電話が多すぎますので住所、電話は不記載でお願いします。 (6回生、O)
- ・前回名簿にEmail Addressを掲載した後、すぐウイルス付メールが5通来ましたので、アドレスの掲載を希望しません。 (8回生、N)
- ・名簿記載を拒否出来るのでしょうか。 (9回生、S)
- ・福岡の不動産業者からの悪質電話に迷惑しています。自宅電話は絶対に掲載しないで下さい。 (12回生、O)
- ・他大学医学部の名簿を用いた犯罪がありました。自宅情報を載せる事に少し抵抗を感じます。他の皆さん是如何でしょうか。 (16回生、S)
- ・最近名簿が悪用され、“振り込め詐欺”や“オレオレ詐欺”などの電話やマンション業者、その他の勧誘電話が頻回にあります。私の住所、勤務先、電話番号は今後一切名簿に載せないようお願い致します。 (17回生、K)
- ・とにかく福大の名簿に載せると、セールス等の電話が多くとても困っています。 (17回生、S)

## ● 会員の声 ●

- ・自宅電話番号は不動産会社からの電話でとても迷惑でしたので空欄にして下さい。

(19回生、A)

- ・同窓会名簿を不正に入手したと思われる業者から、勤務先に頻繁に勧誘電話がかかります。対策はないでしょうか。(26回生、M)

### 【事務局より】

4月施行された個人情報保護法との絡みからも、名簿の考え方、取り扱い方については今後研究していかねばならない問題です。

### 【趣味】

- ・テニス、プロ野球ホークス応援  
(特別会員、池田 靖洋)
- ・囲碁、トレッキング  
(特別会員、吉田 稔)
- ・野球、釣り  
(特別会員、黒木 政秀)
- ・ゴルフ、釣り、映画鑑賞  
(1回生、太田 明)
- ・テニス、ゴルフ  
(1回生、権藤 公和)
- ・アマチュア無線 JF6VNB  
(1回生、馬郡 良英)
- ・釣り、麻雀、将棋、野球  
(1回生、甲斐 保)
- ・マジック、日本マジック療法協会会長、フィリッピン・ディ・オカンポ医大教授、NPO法人博多お笑い塾代笑(理事長)  
(3回生、伊藤 実喜)
- ・ゴルフ  
(3回生、宇都宮英綱)
- ・船  
(3回生、梅野 英輔)
- ・海釣り、ゴルフ、麻雀  
(3回生、田邊 庸一)
- ・書道(師範免許所有・内田鞍山)  
ドライブ(愛車はアルファロメオ166)  
(4回生、内田 克彦)
- ・ウェイクボード、テニス、サッカー観戦  
(4回生、蓮尾 研二)

- ・ゴルフ  
(5回生、中岡 幸一)
- ・水上スキー、ウェイクボード  
(5回生、中村 秀治)
- ・登山  
(5回生、長谷川英夫)
- ・ゴルフ、麻雀、釣り  
(5回生、森 英俊)
- ・最近絵を描く事を始めました。  
(6回生、漢 幸太郎)
- ・フライフィッシング  
(7回生、魚住 浩)
- ・つり  
(7回生、小野 研治)
- ・サッカーチームのオーナー  
(7回生、松嶋 顕介)
- ・卓球、車の模型作り  
(7回生、森下 哲也)
- ・野球、スポーツ観賞  
(8回生、植木 敏晴)
- ・時々バイクでツーリングをしています。九州にもツーリングに行きたいと思っています。  
(8回生、久保田晴郎)
- ・ヨット、誰かクルーになりませんか。  
(8回生、中庭 洋一)
- ・ヨット、ゴルフ  
(8回生、中村 吉孝)
- ・トライアスロン  
(8回生、渕野 泰秀)
- ・ゴルフ、釣り、テニス、スキーバダイビング  
(9回生、渡邊 朋之)
- ・スキー  
(10回生、楠原 浩之)
- ・音楽鑑賞、ドライブ、PC(Mac)、焼酎  
(10回生、深川 康)
- ・テニス、ワイン、旅行  
(11回生、武末 佳子)
- ・淡水大魚釣り  
(15回生、本田 慶臣)
- ・ジャズ観賞、料理、テニスを始めました。  
(15回生、牧 謙太郎)
- ・岩田屋コミュニティカレッジで茶道を習っています。  
(17回生、三宅 夕美)
- ・ホームページを作っています。  
(18回生、白井洋一朗)

### 【その他】

- ・「鳥帽子会」という名前は変です。恥ずかしい。  
(6回生、某)

## 【事務局より】 烏帽子会の名称の由来について

平成3年、同窓会設立10周年を記念して愛称を募集し、52の名称の応募がありました。

本来は平成4年の10周年記念総会で発表される予定でしたが、なかなか纏まらず、平成5年の総会に於ける全員投票によってようやく「烏帽子会」の名称が決定しました。烏帽子会の由来は、福大医学部の地名が「福岡市大字七隈字烏帽子形」であったことによります。文系センターのすぐ北側に池があり、烏帽子形池または烏帽子池と呼ばれていました。想像ですがその池の形（埋め立て前）が烏帽子の形に似ており、池の名や地名の由来になったのかもしれません。

さて烏帽子会の名称で恥ずかしい思いをされたようで申し訳ありませんが、烏帽子そのものは奈良時代、役人の略装の時の冠りものとして生まれました。平安時代になると公家も使用するようになり、平安末期には庶民にも広まり、階級や身分によって形も色も様々となったようです。江戸時代のいろは歌留多に「亭主の好きな赤烏帽子」などの句もありますが、それもそういう風俗をうたつたものでしょう。鎌倉時代になると侍烏帽子が武士の間に広まり、男子の元服の印として重用されるようになります。そしてその冠せ役を烏帽子親というようになりました。NHKの大河ドラマで冠られる「義経」の烏帽子が侍烏帽子です。

## 緊急ご注意

### ★名簿に絡んだ偽電話が急増しています。うっかり乗らないで下さい★

「医学部同窓会の〇〇です。名簿を作るため調査表を送りましたが受取人不在で返送されきました。」という事から始まって住所、電話番号（特に携帯の番号）その他を聞いてまいります。発信人は医局になったり、クラブになったりします。理由も色々です。おかしいなと思って同窓会に問い合わせのあった件数が最近10数件あります。

NHK「クローズアップ現代」によれば、携帯電話の番号を聞き出して、犯人の携帯の電話番号を書き直し（日本では出来ないのでアメリカの機関を使う）、本人になりますて、事故に巻き込まれたような電話を家族宛に発信し「振り込め詐欺」を行う、という事です。絶対に携帯電話の番号を教えないで下さい。その場で返事しないで同窓会にお問合せ下さい。

## 訃 報

重 松 峻 夫 様 (特別会員) 元公衆衛生学教授

平成16年12月 2日ご逝去

調 信一郎 様 (第6回生) 調クリニック副院長

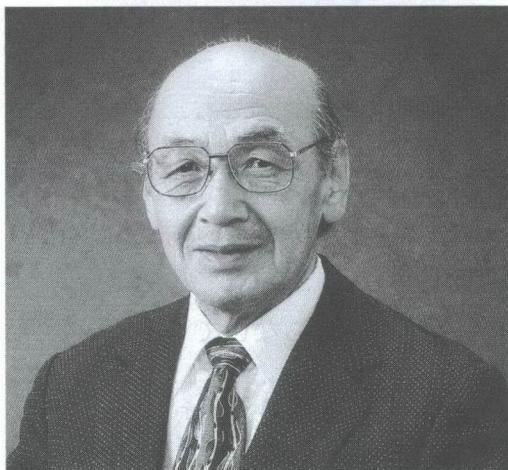
平成16年12月28日ご逝去

犬 塚 貞 光 様 (特別会員) 元外科学第二教授

平成17年 1月 9日ご逝去

## 重松峻夫名誉教授の訃を悼んで

公衆衛生学 教授 守 山 正 樹



平成16年12月2日午後5時13分に、本学の名誉教授であられた重松峻夫先生が肺炎のため78歳のご生涯を閉じられた。

先生は大正15年11月4日、大韓民国鎮海市でお生まれになり、太平洋戦争が終戦に到るまで同市で過ごされたとのことである。

昭和27年に九州大学医学部をご卒業後、昭和33年からは九州大学医学部公衆衛生学教室で、大学院生として研鑽を開始された。その後、九州大学から鳥取大学へとご活躍の場を移され、昭和49年には福岡大学医学部公衆衛生学教室の

初代主任教授にご就任になられた。昭和56年までの教室創設期には、それまでのお仕事の継続として、離島でのフィールドワークや砒素公害対策を手がけられる一方、職業起因性頸肩腕障害、乳癌の日米比較研究などを開始された。

その後、昭和57年から平成2年に至る時期には、創設期以来の死亡統計の研究、生命表の研究を発展させ、地域がん登録の仕事を体系化された。この間、昭和59年には国際がん登録学会を主宰しておられる。その後は、研究と共に、公衆衛生学に関連した社会活動にも、福岡市や福岡県だけでなく広く全国にわたって、更に様々な形で多大な寄与をされ、平成5年からは日本公衆衛生学会の理事長を務められた。

重松先生が研究者として歩まれた時期は、我が国が高度経済成長を遂げた時期と重なる。この激動期に、重松先生は公衆衛生学教室の基礎を作られるとともに、我が国の公衆衛生の発展に、重要な貢献をされた。

前人未踏の業績を挙げられる一方で、周辺との交流を大切にされ、常に暖かで活発な教室づくりを心がけてこられた。福岡大学にご着任の直後、当時、衛生学教室の主任教授であられた江崎廣次先生と話し合われ、研究以外の点に関して、協力して活動しようとの方針を決めてお

られる。この精神は現在にも受け継がれ、社会医学の授業と実習から同門会運営に至るまで、両教室が共同で行っている。

本学をご退任後は、外から教室の発展を支えてくださり、折あるごとに貴重な助言をしてくださった。平成14年の同門会忘年会の折も、「同門会として、ただ宴会をするだけではだめだ。大学に居るものは最新の知見を他の同窓会員にも分かち、しっかり学術的交流を図って欲しい」とのお言葉をいただいている。その後しばらくして、先生は脳卒中の発作で倒れられ、お元気なお姿をお見かけした最後になってしま

った。

公衆衛生学の格調高い授業から、生命表の複雑な統計処理に到るまで、教育と研究の何れにおいても後輩の鑑となってくれた先生のお姿に、もはや接することが叶わぬとは、真に痛恨の極みである。この上は、出来うる限り先生のご意思を受け継ぎ、微力ながら発展させて行きたいと願うのみである。

合同葬は12月18日、積善社福岡斎場でしめやかに営まれた。謹んで亡き先生のご冥福をお祈り申し上げたい。

## 大蔵さんの死を悼む

のぞみレンタルクリニック 井 上 隆 則（7回生）



大蔵さん。まさか、という気持ちでした。それ程唐突な事でした。

福大医学部では、同じサッカーチームの先輩であり、色々な経験で同じ7回卒だったわけですが、奇しくも私達7回卒当番の鳥帽子会総会が最後の接点となりました。それも、大蔵さんに直接電話して参加して貰うように頼んだのも私でした。そして、ちっともお変わりなく元気そうにお見受けしていましたし、総会の日も、子供さんを連れてわざわざ養老さんの講演を楽しみにされていたのがまだ記憶に新しいところです。

私にとっては、特にサッカーチームの恐い先輩だ

らけ（苦笑）の中で、貴重な「やさしい先輩」だったわけですが、大蔵さんほど慕われる先輩も珍しいと今でも思っています。

私に限らず、大学時代から卒後まで、公私にわたってお世話になった後輩は数多いものと察します。私は今でもボールを蹴っていますが、超O B戦で、一緒に珍プレーが出来なくなったのが残念で堪りません。

また壱岐サッカー協会会长のお役目として以前から相談していた壱岐の中学生とアビスパU-15との交流試合の実現も出来ないまま私も心残り一杯の気持ちです。

これまでにも壱岐には行った事はあります、こんな形で訪れるのは忍びない事でした。

後の祭りとはこういう事かもしれませんけれど、大蔵さんの熱心で真面目な仕事振りを聞き及んでからは、もっと気楽にもっと息抜きしながら働けなかったのかと悔やみつつ、もっと早くに壱岐に訪ねて行っておきたかったと思っています。

早いもので、そろそろ桜も、そして今年の鳥帽子会総会も近づいてきました。恒例である総会に先立っての黙祷ではきちんと対峙しますが、その後の私達の戯言は天国まで届くように盛大に語り合いますから、よおーく聞いていてくださいね。いつも通り、言いたい放題ですけれど、大蔵さんが怒らない事は誰もが承知の事ですし。笑って許してくださいね。

## 医局長・医長名簿

(○内の数字は卒業回、筑紫病院の\*印は内科・消化器科の代表)

平成17年4月1日現在

所 属	医 局 長	病 棟 医 長	外 来 医 長
[ 福 大 病 院 ]			
血 液 ・ 糖 尿 病 科	安 西 慶 三	小 河 一 彦	一 瀬 一 郎
循 環 器 科	三 浦 伸一郎 ⑪	新 村 英 也 ⑯	西 川 宏 明 ⑯
消 化 器 科	入 江 真 ⑬	西 村 宏 達 ⑭	早 田 哲 郎 ⑪
腎 臓 内 科	小 河 原 悟 ⑦	村 田 敏 晃	武 田 誠 司 ⑪
呼 吸 器 科	久 良 木 隆 繁	白 石 素 公 ⑪	山 本 文 夫
神 経 内 科 ・ 健 康 管 理 科	齊 藤 信 博 ⑯	井 上 展 聰 ⑯ (6北)	藤 木 富 士 夫 (神経)
"		宗 清 正 紀 (7階)	上 原 吉 就 ⑯ (健管)
精 神 神 経 科	藤 内 栄 太 ⑯	吉 田 公 輔	浦 島 創
" ( デ イ ケ ア )			塚 田 泉 ⑯
小 児 科	柳 井 文 男	安 元 佐 和 ⑦	西 尾 健 ⑯
外 科 第 一	松 尾 勝 一 ⑪	藤 木 健 弘 ⑯	緒 方 賢 司 ⑯
外 科 第 二	白 石 武 史	前 川 隆 文 ②	星 野 誠 一 郎
整 形 外 科	城 島 宏 ⑬	金 澤 和 貴	吉 村 一 朗 ⑯
形 成 外 科	木 下 浩 二	白 武 靖 久 ⑯	藤 田 忠 義 ⑯
脳 神 経 外 科	阪 元 政 三 郎 ⑧	野 中 将 ⑯	阪 元 政 三 郎 ⑧
心 臓 血 管 外 科	芝 野 竜 一 ⑬	林 田 好 生 ⑯	財 津 龍 二 ⑯
皮 膚 科	徳 丸 良 太 ⑯	吉 田 雄 一	高 橋 聰 ⑯
泌 尿 器 科	田 丸 俊 三 ⑨	入 江 慎 一 郎 ⑯	中 村 信 之 ⑯
産 婦 人 科	吉 里 俊 幸	小 濱 大 嗣 ⑯ (3東)	井 上 善 仁
"		辻 岡 寛 ⑯ (3北)	
眼 科	大 里 正 彦 ⑨	木 村 亮 二 ⑯	近 藤 寛 之
耳 鼻 咽 喉 科	今 村 明 秀 ⑯	柴 田 憲 助 ⑨	坂 田 俊 文 ⑯
放 射 線 科	秋 田 雄 三	高 良 真 一 ⑯	木 村 史 郎 ⑯
麻 醉 科	真 山 崇 ⑬	廣 田 一 紀	平 田 和 彦 ⑯
歯 科 口 腔 外 科	豊 福 明	喜 久 田 利 弘	手 島 将
病 理 部	久 野 敏		
臨 床 検 查 部	明 比 祐 子		
輸 血 部	熊 川 み ど り		
救 命 救 急 センタ ー	益 崎 隆 雄 ⑯		
総合周産期母子医療センター		喜 多 村 泰 輔 ⑯	
		雪 竹 浩 ③	
[ 筑 紫 病 院 ]			
筑紫病院(総医局長)	中 島 力 哉 ⑬		
内 科 第 一	山 之 内 良 雄 ⑦	土 屋 芳 弘 ⑬	八 審 英 二 ⑯
内 科 第 二	豊 島 秀 夫 ⑧	豊 島 秀 夫 ⑧	二 宮 寛 ②
消 化 器 科 ・ 内 視 鏡 部	植 木 敏 晴 ⑧*	宗 祐 人 ⑬*	高 木 靖 寛 ⑯
小 児 科	喜 多 山 昇 ⑧	深 町 滋 ⑯	喜 多 山 昇 ⑧
外 科	関 克 典 ⑯	永 川 祐 二 ⑯	永 川 祐 二 ⑯
整 形 外 科	伊 崎 輝 昌	古 賀 崇 正 ⑯	伊 崎 輝 昌
脳 神 経 外 科	堤 正 則	相 川 博	風 川 清
泌 尿 器 科	石 井 龍 ⑤	平 浩 志 ⑯	石 井 龍 ⑤
眼 科	武 末 佳 子 ⑯	佐 川 隆 司	武 末 佳 子 ⑯
耳 鼻 咽 喉 科	宮 城 司 道 ⑨	池 田 宏 之 ⑯	菅 原 真 由 美
放 射 線 科	中 島 力 哉 ⑬		
麻 醉 科	堀 浩 一 郎 ⑬		
病 理 部	原 岡 誠 司		
救 急 部	三 原 宏 之 ⑨		

## 教育職員人事（併任講師以上）

(○内の数字は福大医学部卒業回)

[平成16.10.2～17.4.1]

区分	所 属	資 格	氏 名	発 令 日	摘 要
退 職	内 科 学 第 五	教 授	西 丸 雄 也	17. 3. 31	定年
	眼 科 学	教 授	大 島 健 司	17. 3. 31	選択定年
	歯 科 口 腔 外 科 学	教 授	都 温 彦	17. 3. 31	定年
	筑 紫 消 化 器 科	教 授	八 尾 恒 良	17. 3. 31	定年
	整 形 外 科 学	助 教 授	井 上 敏 生	17. 3. 31	一身上の都合
	呼 吸 器 科	講 師	石 橋 正 義	17. 3. 31	県立太宰府病院
	循 環 器 科	講 師	小 川 正 浩 ⑭	17. 3. 31	米国留学
	循 環 器 科	講 師	辻 恵 美 子	17. 3. 31	一身上の都合
	神 経 内 科・健 康 管 理 科	講 師	松 永 洋 一 ⑤	17. 3. 31	徳島文理大薬学部
	筑 紫 消 化 器 科	講 師	坂 口 正 剛	17. 3. 31	一身上の都合
	内 科 学 第 三	講 師	渡 邊 洋 ④	17. 3. 31	福岡赤十字病院
	精 神 医 学	講 師	石 井 久 敬	17. 3. 31	一身上の都合
採 用	生 理 学	併任講師	藤 城 直 二	17. 3. 31	選択定年
	外 科 第 一	併任講師	眞 栄 城 兼 清 ④	17. 3. 31	一身上の都合
	生 理 学	教 授	井 上 隆 司	17. 4. 1	九州大学医学研究院
	眼 科 学	教 授	内 尾 英 一	17. 4. 1	横浜市立大学医学部
	放 射 線 部 第 二	教 授	桑 原 康 雄	17. 4. 1	
	神 経 内 科・健 康 管 理 科	講 師	鍋 島 茂 樹 ⑬	17. 4. 1	
	皮 膚 科	講 師	吉 田 雄 一	17. 4. 1	
昇 格	泌 尿 器 科	講 師	松 岡 弘 文 ⑧	17. 4. 1	
	産 婦 人 科	講 師	宮 本 新 吾	17. 4. 1	
	解 剖 学	教 授	立 花 克 郎	17. 4. 1	
	内 科 学 第 五	助 教 授	坪 井 義 夫	17. 4. 1	
	心 臓 血 管 外 科	講 師	岩 橋 英 彦 ⑯	17. 4. 1	
	整 形 外 科	講 師	副 島 修 ⑨	17. 4. 1	
	消 化 器 科	併任講師	江 口 浩 一	17. 4. 1	
	精 神 神 経 科	併任講師	藤 内 栄 太 ⑳	17. 4. 1	
	外 科 第 二	併任講師	篠 原 徹 雄 ⑫	17. 4. 1	
	整 形 外 科	併任講師	佐 伯 和 彦 ⑯	17. 4. 1	
休 職	病 理 学	併任講師	中 山 吉 福 ⑦	17. 4. 1	
	腎 臓 内 科	併任講師	笹 富 佳 江 ⑬	17. 4. 1	
休 職	脳 神 経 外 科	講 師	継 仁 ⑧	17. 4. 1	白十字病院

## 教授就任おめでとうございます

小田島安平（3回生） 17.4.1 埼玉医科大学小児科学教授にご就任  
松永 洋一（5回生） " 徳島文理大学薬学部教授にご就任

## 平成16年度 在外研究援助金受給者 (平成16年11月以降)

小川 正浩（14回生） 福岡大学病院循環器科 UCLA Cedars-Sinai Medical Center  
三好 恵（15回生） 福岡大学筑紫病院内科第一 Cleveland Clinic Foundation  
森 憲（21回生） 福岡大学病院循環器科 Cardiovascular Research Foundation

## 烏帽子会会員名簿第8号 過誤訂正とお詫び (心から過誤をお詫びしご訂正をお願いします)

### [医学部・同窓会年表]

- ・ 2p 6行目の次に「61.1.1 第2代筑紫病院長に浅尾學教授（心臓血管外科学）就任」を挿入
- ・ " 14行目、「12.1 第2代筑紫病院長に朝長正道教授（脳神経外科学）就任」を削除
- ・ " 16行目の次に「4.1 第3代筑紫病院長に朝長正道教授（脳神経外科学）就任」を挿入
- ・ " 30行目、「第3代筑紫病院長・・」を「第4代筑紫病院長・・」に訂正
- ・ 3p 25行目、「第4代筑紫病院長・・」を「第5代筑紫病院長・・」に訂正
- ・ 4p 6行目、「第5代筑紫病院長・・」を「第6代筑紫病院長・・」に訂正
- ・ " 下から13行目、「第6代筑紫病院長・・」を「第7代筑紫病院長・・」に訂正

### [正会員]

- ・ 43p: 5回生 本村 光明 [勤務地] 誤 佐賀県小城郡三日月町 正 佐賀県小城市三日月町  
[Eメール] 誤 motomura-m@mtj. 正 motomura\_m@mtj.
- ・ 71p: 9回生 藤田 節也 [勤務地] 誤 507-0033 岐阜県多治見市本町1-2 前プラザ・テラ4階  
正 507-0033 岐阜県多治見市本町1-2 駅前プラザ・テラ4階
- ・ 98p: 14回生 菊池 陽介 [勤務先] 誤 福岡大学筑紫病院 消化器科 院長  
正 福岡大学筑紫病院 消化器科
- ・ 126p: 19回生 久保田郁子 [勤務地] 誤 818-8502 福岡県筑紫野市俗明院377-17  
正 818-8502 福岡県筑紫野市俗明院377-1
- ・ 144p: 22回生 中村 好成 [勤務地] 誤 819-0025 福岡市西区石丸3-2-1  
正 814-0180 福岡市城南区七隈7-45-1
- ・ 147p: 23回生 印藤 昌彦 [勤務地] 誤 737-0134 広島県呉市広多賀谷町1-5-1  
正 722-0002 広島県尾道市古浜町7-19
- ・ 149p: 23回生 駿河理恵子 [勤務地] 誤 814-0180 福岡市城南区七隈7-45-1  
正 818-8502 福岡県筑紫野市俗明院377-1  
誤 092-801-1011 正 092-921-1011

### [開業・自家勤務医]

- ・ 222p: 甘木朝倉支部 9回生 石井竹彦を削除し、218p 筑後支部へ移す

## 事務局からのご連絡

### ■人生50年の記録をお寄せ下さい。

医学部が出来て33年、卒業生を送り出すこと28回、1回生は卒業して既に27年、最も50の坂を越えました。そんな皆さん方もそれぞれの土地で、それなりの社会的地位を得て仕事に励み趣味を深め、子供の成長を喜びながら甲斐ある人生を生きておられます。喜び苦しみの染みこんだご活動の様子や、味のあるご趣味の蘊蓄をご披露戴きたいと存じます。磨き高められた皆様の人生記録で、この会報に風格を添えて下さい。

### ■住所や電話番号を聞き出そうとするインチキ電話にご注意。

以前、悪徳業者は如何にして同窓会の会員名簿を手に入れるかに苦心していました。いろんなウソ電話が頻繁に同窓会に掛かってきました。名簿紛失、住所変更、巧まれたニセ開業、ニセ結婚、ニセ離婚。手を変え品を変えいろいろの手で私を騙そうとします。しかしその電話は100%嘘でした。現在は振込め詐欺の為の電話番号聞き出し電話が、言葉巧みに直接皆さんの方に掛かってきています。（詳しくは25ページに掲載）同窓会がこういう電話を掛けることはありません。絶対に個人情報を漏らさないで下さい。大変なことになりかねません。

### ■個人情報保護法と会員名簿

4月1日から個人情報保護法が施行されました。個人情報あっての同窓会にとっては重大事態です。しかし正直まだ勉強不足で、同窓会の情報保護が如何にあるべきかを具体的に思い描くまでは至っていません。今後理事会でしっかりと議論されるはずですが、会員の方々にも是非ご意見を戴きたく思います。お待ちしています。

### ■ペイオフ対策

こちらも4月1日からペイオフ制度が全面解禁となりました。同窓会は所有する財産については全額保護を重点に対応することになりました。定期預金の大部分を逐次決済型普通預金に切り替えていきます。同窓会の財産は毎年秋の会報でお知らせしています。

## 編 集 後 記

本当に思いもかけない出来事でした、福岡西方沖地震。3月20日の発生以来未だに余震が続いているのですが、会員諸氏、そのお知り合いの方々には被害などありませんでしょうか。心からお見舞い申し上げます。この100年ぶりとも300年ぶりとも言われる希有な体験をし損ねた、と言うのはいささか不謹慎でしょうか？（しかし余震でも十分怖い！）

今年初めには第8号の名簿も発行されました。名簿の悪用により迷惑を被っているのは一人だけではありません。お寄せ頂いた生の声を掲載してみました。会員同士の情報の共有、意見交換、対話のきっかけになればと思います。理事会でも常に最善の策をと頭をひねっています。ホームページや会報もそうですが情報の提供と保護はそのバランスが微妙です。

地下鉄も開通し、母校の景色も刻々と変わっているようです。少しづつ着実に歴史を刻み、重ねている我らが鳥帽子会。福岡にいてさえその変化にはついていけないところもあります。「ふるさとは遠くにありて思うもの」とも言われますが、私にとってはそれをしみじみと実感したこの一年でした。

さて、時は春。いつものように巡ってくる新旧交代、異動の時期です。健全な新陳代謝が、わが福大医学部にも起こりますように。

広報担当：田中伸之介、武末佳子（文責）、立川 裕、喜多村泰輔

## 烏帽子会会報第38号

---

発行日 平成17年5月15日

発行人 高木忠博

編集人 田中伸之介

発行所 〒814-0180

福岡市城南区七隈7-45-1

福岡大学医学部同窓会

電話 092-865-6353(直通)

092-801-1011(代表)

内線 3032

FAX 092-865-9484

E-mail:eboshi@minf.med.fukuoka-u.ac.jp

印刷所 ロータリー印刷(株)

福岡市中央区長浜2-1-30

電話 092-711-7741

FAX 092-711-7901